

⑩ 日本国特許庁(JP)

⑪ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報(U) 平2-18314

⑬ Int. Cl.<sup>3</sup>

A 45 D 34/04

識別記号

J

庁内整理番号

8068-3B

⑬ 公開 平成2年(1990)2月7日

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全 頁)

⑭ 考案の名称 液体化粧品入塗布材

⑮ 実 願 昭63-95413

⑯ 出 願 昭63(1988)7月19日

⑰ 考 案 者 勝 部 正 隆 兵庫県西宮市天道町14番地6-203

⑱ 出 願 人 株式会社ナリス化粧品 大阪府大阪市福島区海老江5丁目1番6号

## 明 細 書

### 1. 考案の名称

液体化粧料入塗布材

### 2. 実用新案登録請求の範囲

- (1) 重合状に対設される一対の塗布材間の略中央に、液体化粧料を酸化防止膜で被覆せしめたカプセル化粧料の一定量を載設すると共に、これら両塗布材間の外縁を縫着して構成した事を特徴とする液体化粧料入塗布材。

### 3. 考案の詳細な説明

#### (産業上の利用分野)

本考案は、カプセル化粧料を封入した塗布材に係り、詳しくは、酸化により分解し易いビタミン剤等を含有させた液体化粧料を防止膜で被覆してなるカプセル化粧料を、塗布材内に封入せしめた液体化粧料入塗布材に関するものである。

#### (従来技術とその問題点)

一般に、乳液や化粧水等の液体化粧料を皮膚に塗布する場合、不織布やコットン等のパフ状の塗布材に液体化粧料を付着させた後、皮膚に塗布す

るようになっている。

ところで、近年、皮膚に栄養分を吸収させることにより、しみやそばかす等の皮膚傷害を防止しようとする研究がなされ、特にビタミン剤は上記皮膚傷害の防止や栄養補給に有効であることが証明されている。

しかし、前記したビタミン剤等を含む液体化粧料は、酸化により変化、或いは分解し易い為、このような液体化粧料は、各成分の安定の為に防止膜でカプセル状に被覆させる事が必要である。

すなわち、第1図に示したように、スクワレンやリノレン酸等の液体化粧料31を、寒天やゼラチン等で構成された酸化防止膜32で被覆せしめて、カプセル化粧料3を構成する必要があり、このように構成することにより、使用時にパフ状の塗布材を用いて皮膚へ圧着させれば、カプセル化粧料3の酸化防止膜32が潰れ、内部の液体化粧料31はその有効成分を分解させることなく皮膚に付着して、液体化粧料31の成分効果を発揮させることができるのである。

ところが、上記のように構成したカプセル化粧料は、効果的に大変良いのであるが、使用に際して酸化防止膜が塗布材に残存する為、該残存物が皮膚に付着するという問題があり、更に、カプセル化粧料を塗布材へ採取するに際して、容器内のカプセル化粧料の定量をさじ等で採取するという作業が面倒であると共に、酸化防止膜は比較的軟性であるため塗布材への採取時に、該防止膜が潰れて内部の液体化粧料が流出し、これにより、容器内の他のカプセル化粧料の酸化防止膜の溶解をも誘発させるという問題が生じていた。

#### （考案の目的）

本考案は、上記問題点に鑑みてなされたものであり、液体化粧料を防止膜で被覆してなるカプセル化粧料の一定量を、予め塗布材内に封入せしめて、使用に際して、片手で該塗布材を軽く把手するだけで酸化防止膜を塗布材内に残存させたまま内部の液体化粧料だけを塗布材表面に流出させ、これを皮膚に付着させることができるようにした液体化粧料入塗布材を提供することを目的として

成されたものである。

( 考案の構成 )

すなわち、本考案の液体化粧料入塗布材は、重合状に対設される脱脂綿・不織布等からなる一対の塗布材間の略中央に、液体化粧料を酸化防止膜で被覆せしめたカプセル化粧料の一定量を載設すると共に、これら両塗布材間の外縁を縫着して構成した事の特徴とするものである。



( 考案の作用 )

本考案の液体化粧料入塗布材は、以上のように構成したことにより、次に示す作用をもたらすものである。

すなわち、重合状に対設される脱脂綿・不織布等からなる一対の塗布材間に、カプセル化粧料の一定量を載設し、その外縁を縫着して構成しているため、使用時に片手で該塗布材を軽く把手するだけで酸化防止膜を塗布材内に残存させたまま内部の液体化粧料だけを塗布材表面に流出させ、皮膚に塗布することができる。

以下、本考案の液体化粧料入塗布材を、図面に

示す一実施例に基づきこれを詳細に説明する。

(実施例)

図面は、本考案の液体化粧料入塗布材の一実施例を示したものであり、該液体化粧料入塗布材 1 は、重合状に対設される脱脂綿・不織布等からなる一対の塗布材 2・2 間の略中央に、液体化粧料を 3 1 酸化防止膜 3 2 で被覆せしめたカプセル化粧料 3 の一定量を載設すると共に、これら両塗布材 2・2 間の外縁を縫着或いは圧着若しくは融着して構成されたものである。

尚、前記塗布材 2 は、必ずしも方形状の塗布材 2 の一対を必要とするものではなく、第 2 図に示したように、中央で折曲可能な前記塗布材よりも稍幅広の塗布材 2' であっても良く、この場合においては、該塗布材 2' の左右片面略中央に前記カプセル化粧料 3 の一定量を載設し、塗布材 2' を中央で折曲げた後、その各開口縁を縫着或いは圧着若しくは融着させれば良い。

更に前記カプセル化粧料 3 は、前述したように液体化粧料を 3 1 酸化防止膜 3 2 で被覆せしめた


ものであるが、前記液体化粧品 3 1 は、例えば、スクワレンやリノレン酸を含有するものや、これらにビタミン剤を含有させたもの等、皮膚に対して有効な成分を含有するものであればどのようなものであっても良く、また、前記酸化防止膜 3 2 においても、軟性で且つ皮膜を形成して、上記液体化粧品 3 1 と化学変化を起こし得ないものであれば、寒天やゼラチン・アルギン酸ナトリウム等どのようなものであっても良い。

(実施例の作用)

本考案の液体化粧品入塗布材 1 は、以上の一実施例で示したように構成されたものであり、これを使用するにあつては、使用時に片手で該塗布材 2・2 間、或いは塗布材 2' を軽く把手した後、該液体化粧品入塗布材 1 を第 4 図に示したように皮膚に当接させて塗布或いはパッティングするだけで良く、前記塗布材 2・2 間、或いは塗布材 2' の把手により、酸化防止膜 3 2 が潰れ、該防止膜 3 2 内部の液体化粧品 3 1 は塗布材 2・2 間、或いは塗布材 2' に吸収されると共に、該表

面に流出し、液体化粧品 3 1 に酸化等の変化を起こさせることなく皮膚に塗布することができる。

尚、上記のように使用した場合、酸化防止膜 3 2 は、前記塗布材 2・2 間、或いは塗布材 2' 内に粕として残存した状態を維持しているため、液体化粧品入塗布材 1 は使用後に廃棄するだけで良い。

 考案の効果)

以上のように、本考案の液体化粧品入塗布材は、重合状に対設される一对の塗布材間の略中央に、液体化粧品を酸化防止膜で被覆せしめたカプセル化粧料の一定量を載設すると共に、これら両塗布材間の外縁を縫着して構成したものであるから、従来のような、容器内のカプセル化粧料の一定量を採取してパフ状の塗布材に付着させた後、皮膚に塗布するといった面倒な作業や、該容器内のカプセル化粧料の採取時に、該カプセル化粧料の防止膜が潰れて内部の液体化粧品が流出し、容器内の他のカプセル化粧料の酸化防止膜の溶解を誘発させるという問題を生じさせることなく、使



い捨ての使用が可能であると共に、液体化粧料の含有有効成分を変化させることなく衛生的に保たせることができ、しかもそのままの状態で使用できるという効果を有するものであり、塗布時やパッティング等を行なうに際して、極めて有効的、且つ実用的なものである。

#### 4. 図面の簡単な説明

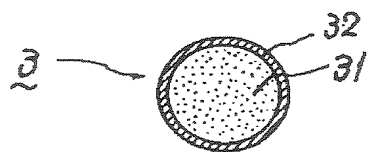
第1図はカプセル化粧料の説明図、第2図及び第3図は本考案の液体化粧料入塗布材の実施例を示す説明図、第4図は本考案の液体化粧料入塗布材の実施状態を示す説明図、第5図は本考案の液体化粧料入塗布材の使用後の酸化防止膜の状態を示す説明図。

1は液体化粧料入塗布材、2・2'は塗布材、3はカプセル化粧料、31は液体化粧料、32は酸化防止膜。

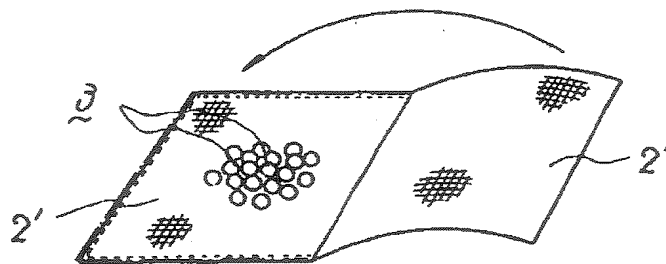
実用新案登録出願人

株式会社ナリス化粧品

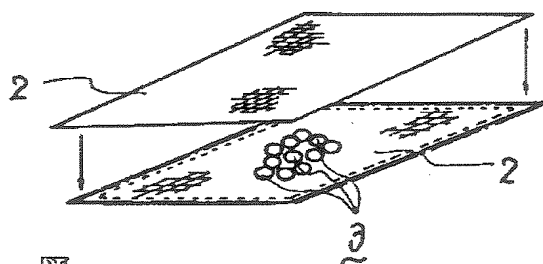
第 1 図



第 2 図



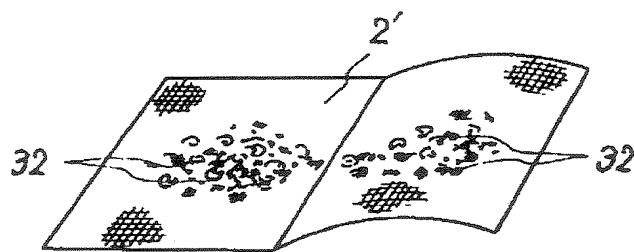
第 3 図



第 4 図



第 5 図



154

実用新案登録出願人

株式会社ナリス化粧品

実開2-18314